

元文部官僚・映画評論家
寺脇研氏セレクト

高校生に薦めたい 社会のリアルを知る映画15

違う文化で生きる人たちが
社会の諸相を教えてください

鹿児島県内にある中高貫校へ通っていた私が、初めて一人で映画を観たのは高校へ進級する春休みのこと。修学旅行で京都へ行き、自由時間に映画館で『若者たち』という作品を観ました。両親を亡くした5人兄弟が遅く生きる姿を描いた青春ものです。まったく知らない世界がそこにありました。それからもう映画に夢中、頻りに映画館へ足を運びました。



①『男はつらいよ』シリーズ (山田洋次監督 1969~97年)

©1969 松竹(株) / 瀧美清主演で28年間に全48作品+特別編が公開された国民的シリーズ。フーテンの寅さんを軸に、下町の人情が描かれている。まさに日本人の心の原風景がここにある。

高校時代から好きだったのは『男はつらいよ』シリーズ①。第一作が高2の時にスタートしたのですが、48作品すべてリアルタイムで観ました。鹿児島で暮らす私にとって

は各地を放浪するテキヤ稼業というのがとても新鮮でした。これは今の高校生にも一番お薦めしたい作品です。寅さんや、彼を取り巻く人々の心の温かさを知ること、人間社会において大事なものは何かを感じ取ることができます。

今でこそインターネットで気軽に知らない大人ともコンタクトが取れる時代ですが、でも、当時は映画や本だけが、自分の知らない世界を教えてください。私にとって映画は未知なる社会へ誘ってくれる扉であり、同時に現実逃避できる場所でした。それは、今の高校生にとっても同じではないでしょうか。映画は違う文化で生きる人たちの価値観やものの見方を想像させてくれるし、社会の諸相に気づかせてくれます。観る前とは違った目で世の中を見つめる目も養ってくれます。

映画は何かを知るだけでなく、物事を考える入口。だからこそ、ぜひ高校生にも多くの映画を観てほしいと思います。では、私がお薦めしたい映画を紹介していきますましょ。

② 専門学校生、大学生…
さまざまな学生の
生き方を知る



②『はさみ hasami』 (光石富士朗監督 2010年)

©2010「はさみ hasami」製作委員会 / 理美容専門学校を舞台にした絆の物語。学校で起きた実話から脚本が作られており、実際の理美容師による実技シーンもあるので、職種を知るうえでも参考になる。

まずは『はさみ hasami』②。理美容専門学校で学ぶ若者たちのさまざまな悩みや葛藤、挫折、そして成長を描いた作品です。彼らが抱える問題を通して学ぶことの意味、働くことの意味を教えてください。撮影は実際の専門学校、またエキストラも実際の学生たちだったたりするので、リアルに理美容学校の様子を把握できるのもこの映画の魅力です。

『アンダンテ〜稲の旋律〜』⑥は、引きこもりという社会問題と、今の農業事情についても学べるおもしろい映画です。



寺脇研氏

32年間務めた文部科学省を06年11月に退職後、京都造形芸術大学教授、映画評論家、NPO教育支援協会チーフ・コーディネーター、カタリバ大学など多方面で活躍。近著に『「フクシマ以後」の生き方は若者に聞け』（主婦の友社）など。高校時代から「キネマ旬報」に読者コラムニストとして執筆する無類の映画好き。今なお邦画・韓国映画を中心に年間300本近くを鑑賞。



③『僕たちは世界を変えることができない』 (深作健太監督 2011年)

©2011「僕たち」フィルムパートナーズ / カンボジアに小学校を建てる大学生たちの姿を描く。友情や恋、現実にも悩む姿だけでなく、カンボジアの歴史、辛い現実も伝えてくれる。

『僕たちは世界を変えることができない But, we wanna build a school in Cambodia』③は絶対に観てほしい映画です。カンボジアに学校を作った大学生の物語ですが、これは現役大学生の体験記が原作。タイトルは決して若者の無力感を示しているのではなく、「平凡な学生生活を送っている自分たちには、世界全体を変えることなんてできないけれど、でも、学校を作ることではあるんだ」という希望をストレートに表現しています。また、この映画を通して、カンボジアという国の実情を知ることができます。

反面教師として観てほしいのが連合赤軍のリンチ事件を題材とした『光の雨』⑦もしくは『実録・連合赤軍 あさま山荘への道程』などです。60年代の二部の若者にと

学生時代に観る映画が、人生に大きく影響を及ぼすことがあります。社会のあり様を知ることができるのも映画の良さ。そこで今回は、教育者であり、映画評論家でもある寺脇研氏に、高校生にお薦めの映画を選んでいただきました。

取材・文 / いのうえりえ

映画上映会の
お薦め

映画はフィクション、でも現実を教えてくれる。
生徒同士で鑑賞し、意見交換をしてみよう



NPOカタリバが「2050年をデザインする」をコンセプトに実施している「カタリバ大学」。ここでは高校生、学生、社会人が一緒になって一つのテーマを議論している。映画評論家でもある寺脇氏が学長を務めるということもあり、昨年暮れからは、3回にわたり、「映画は社会を変えるのか?」というテーマで行われた。ちょうど取材当日は阪神・淡路大震災から15年後の今を描いた『その街の子ども劇場版』^④を上映。鑑賞後、東日本大震災後の復興とどう向き合ったらよいのかを議論した。

映画を観てそれぞれに何かを感じ取っている。『その

街の子ども劇場版』と一緒に観たことで、映画の感想と共に、震災についての話し合いも、より具体的に繰り広げられていた。参加していたある高校生は「映画を観たことで東日本大震災の時のことを改めて思い出した」。ある大学生は「映画はあくまでフィクション。だけど、現実に戻って物事を考えさせてくれる。それが映画の効用だと思った」と話してくれた。家でDVD鑑賞という方法もあるが、みんなで暗闇の中で集中して観る意義もある。「カタリバ大学」のように、映画を観て感想を言い合ったり、議論する会を実施してみたいかがだろうか。

世界の普遍的なテーマを扱い、それを鋭く問いかけている『闇の子供たち』^④もいい映画です。タイでの幼児虐待、人身売買や売春、臓器移植といった深刻なテーマを扱い、裕福な国と貧しい国のそれぞれの罪をさらけ出しています。この映画を撮った阪本順治監督は、最後の最後までリアリズムを貫き、センタリズムをいっさい排しています。



「闇の子供たち」
(阪本順治監督 2008年)

◎映画「闇の子供たち」製作委員会/タイを舞台に少女売春や人身売買といった闇の現実を描いている。現実を題材に、最終的には日本人にはね返ってくるストーリー展開が心に重く響く。考えさせられる映画だ。

社会の裏側を知り、社会の
かわり方を考えられる

深く社会を洞察できると思っています。

一方、『僕たちは世界を変えることができない』に登場する学生たちは、のほほんと暮らしながらも、地道なボランティア活動によって、確実に世の中を変えています。同じように悩みながらも『僕たちは』の学生たちのほうが実践的だといえます。そんな具合に、映画を通してさまざまな若者の生き方を比較してみると、さらに深く社会を洞察できると思っています。

それだけに観る者の心をえぐるようなシーンも多々あり、高校生には多少刺激が強いかもしれません。でも、感受性豊かな高校生こそぜひ観て何かを感じてほしいし、社会のひずみや闇を知ってほしいと思います。

日本の子どもたちの実情を知ることが出来るのが『隣となる人』^⑧。保護して育てる親や親戚のいない子どもたちを育てる児童養護施設の様子を撮り続けたドキュメンタリーです。『月あかりの下で』^⑨は夜間定時制高校のドキュメンタリー。いずれも、こいつら子どもたちが実はとても身近にいることがよくわかります。

そのほか、60歳の本村と25歳の映画監督という異なる世代の交流を描いた『キツキと雨』^⑩もお薦めです。大人がどう若者を見つめているのかを知ることができます。

戦争と平和について考えるなら、沖縄で起こった米軍機墜落事件を題材とした『ひまわり』^⑪や、終戦の日の人間模様を描いた『日本のいちばん長い日』^⑫などがいいと思います。特に『ひまわり』は主人公の大学生と同じ目線に立ち、自分たちに何ができるかを考えさせてくれます。

それだけに観る者の心をえぐるようなシーンも多々あり、高校生には多少刺激が強いかもしれませんが、感受性豊かな高校生こそぜひ観て何かを感じてほしいし、社会のひずみや闇を知ってほしいと思います。

日本の子どもたちの実情を知ることが出来るのが『隣となる人』^⑧。保護して育てる親や親戚のいない子どもたちを育てる児童養護施設の様子を撮り続けたドキュメンタリーです。『月あかりの下で』^⑨は夜間定時制高校のドキュメンタリー。いずれも、こいつら子どもたちが実はとても身近にいることがよくわかります。

なお、どの作品においても必ず「仕事」は登場します。『キツキと雨』であれば、林業と映画監督。『月あかりの下で』は教師、『闇の子供たち』は新聞記者など。ですから「働く」という意味や、大人が働く姿を垣間見るといった意味でも、映画は非常に有効な手段だと思います。

韓国映画は情が深いのが魅力。同時に、韓国の人々の暮らしか考え方も学べます。また、日本映画が在日韓国人を描いた『パッチギ』^⑭などに見比べると、隣国との共通点、差異が浮かび上がってきます。

特にお薦めは韓国で大ヒットした『グエムルー漢江の怪物』^⑤。2000年に在韓米軍が漢江にホルムアルデヒドを大量流出させた事件を題材にした映画ですが、反米性だけでなく、自分の家族を守るために怪物に立ち向かう人々の姿に、濃厚に韓国社会の精神が刻まれています。

刑務所帰りの男性と脳性麻痺の女性の恋愛を描いた『オアシス』^⑬は韓国きつての純愛もの。福祉の先進国でありながらも、弱者に実は冷たい社会の中で、お互いにいたわり合い、生きていく二人の姿に感動します。



「グエムルー漢江の怪物」
(ボン・ジュ/監督 2006年) <韓国>

◎2006Chungeorahm Film. All rights reserved. 突然現れた怪物にソウルの街が襲われ、恐怖と混乱に陥る。実際に起きた在韓米軍によるホルムアルデヒド垂れ流し事件が題材となっている。

隣国、韓国を知ることを通して日本社会を考えるきっかけに

私は日本映画ばかり観てきましたが、10年ほど前から韓国映画も観るようになりました。韓国と日本の社会が同質のものになりつつあるのを感じ、今後は両者の関係を意識していかなければと思っただけです。

寺脇氏お薦め作品解説

『アンダンテ〜稲の旋律〜』⑥

(金田敬監督 2010年)



◎映画「アンダンテ〜稲の旋律〜」製作委員会/販売元コーゴコーポリアル企画7350円(税込)。

都会で引きこもっていた主人公の女性が、千葉の農家の人々と出会い、触れ合うことで失われた心を取り戻していく人間再生の物語。現代社会が抱える「ひきもり」の問題だけでなく、危機迫る食料自給率のこと、さらには食と農業の問題も把握できる。農業がいかに人間の心を癒してくれるものなのかも伝わってくる。

『光の雨』⑦

(高橋伴明監督 2001年)

1972年に起きた連合赤軍による同志リンチ事件を映画化したもの。原作は立松和平の小説『光の雨』。映画の中で「連合赤軍」についての映画を作ろうとする若者たちを描くというスタイルの映画のため、客観的に事件のことを考えることができる。特に、若手俳優たちが30年前に事件を起こした自分たちと同世代の心情がうまくつかめないことを語っていたりするシーンでは、演じている人と自分を照らし合わせて考えることができる。武力革命で世界は変わらなないことも実感できるはずだ。

『隣(とな)る人』⑧

(刀川和也監督 2012年)



◎「隣(とな)る人」に関する情報は下記サイトで。なお、自主上映会では希望者を受け付けている。

児童養護施設「光の子どもの家」の生活に8年にわたって密着したドキュメンタリー。不安で揺れ動いたり、重圧と格闘する子どもたちに寄り添い続けようとする保育士、子どもと再び生活できるようにともかく実の親など、人々の姿が瑞々しく描かれている。さまざまな事情で親と暮らせない同世代がいることを知ってほしい。

『月あかりの下で』⑨

(演出撮影編集 太田直子 2010年)



◎グループ現代上映会/各地で上映中。上映会では希望者を受け付けている。

映画の舞台は1学年1クラス、生徒120人足らずの埼玉県立浦和商業高校定時制のあるクラス。教師に暴言を吐く生徒、家庭内暴力が原因で登校できなくなった生徒、自傷行為を繰り返す生徒……。さまざまな問題を抱えた彼らが学校という居場所を家族のようにぶつかり支え合う。その4年間を追ったドキュメンタリー。

『キツキと雨』⑩

(沖田修監督 2012年)



◎2011「キツキと雨」製作委員会/販売元角川書店4935円(税込)

のどかな山村に、ある日突然ソビ映画の撮影隊がやってきた。その撮影を手伝うことになった60歳の木こりと、気弱でスタッフをまとめられずにいる25歳の新人映画監督との出会いと交流を描いている『キツキと雨』。ユーモラスな展開のなかで、逃げずに目の前の問題に向き合っていれば、助けられる大人がいることが伝わってくる。大人の、若者に対する想いを知ることができる映画だ。

『ひまわり〜沖縄は忘れないあの日の空を〜』⑪

(及川善弘監督 2013年)



◎2012映画「ひまわり」製作委員会/全国上映中。学校上映会では希望者を受け付けている。

悲惨な沖縄戦以降、沖縄県民は、平和な時代を求め懸命に働いた。そんな矢先の1959年6月30日、嘉手納基地から飛び立った米軍のジェット戦闘機が石川市(現うるま市)へ墜落、小学校へ炎上しながら激突。住民6名、学童11名の尊い命を二瞬にして奪う大惨事に……。この映画は戦争とこの宮森事件を題材に、遺族・被害者たちの証言を元に制作。沖縄だけではなく日本人全体が抱える基

地・外交問題に大きな疑問を投げかける。沖縄国際大学に通う学生が主人公なので、高校生も自分と重ね合せて考えられるのでは？

『日本のいちばん長い日』⑫

(岡本喜八監督 1967年)

1945年8月14日正午の御前会議におけるポツダム宣言受諾の決定から、翌15日正午のNHKラジオでの終戦の詔勅の放送までの24時間を描いた作品。無条件降伏を受け入れるまでの昭和天皇や当時の鈴木貴太郎内閣の苦悩、クーデターを計画する軍人たち、官僚たちの右往左往を描くことで、戦争の愚かさ滑稽さを濃密に醸し出している。終戦当時、指導者たちがどういう行動を取ったのかを知ることができると同時に、今の原発問題と重ねて考えると社会のしくみが見えてくる。

『オアシス』(韓国映画)⑬

(イチャンドン監督 2002年)

社会になじめない前科者の男と、脳性麻痺で身体の不自由な女性が出会い、愛しあう。ひどく痛々しく可憐なラブストーリー。2人の姿は仲良くふざけあい、笑いあう恋人のそれと何ら変わらない。にもかかわらず、彼らの純粋さには障害や前科というフィルターが常につきまとい、社会に通用しない。福祉の先進国である韓国でも弱者に冷たい。これは日本社会も同じ。私たちに必要な社会とは何かを考えさせてくれる。

『パッチギ!』⑭

(井筒和幸監督 2005年)



◎2004「パッチギ!」製作委員会/発売・販売元ハビネット2079円(税込)

60年代後半の京都を舞台に、在日朝鮮人の女子高生に一目惚れした日本人高校生の恋の行方と、彼らを巡る若者たちを描いた青春ドラマ。松山猛による自伝的小説『少年Mのイムジン河』が題材となっている。痛快な青春ものでありながらも、在日コリアンの背景、生き方を知ることができる。

『その街の子ども劇場版』⑮

(井上剛監督 2010)



◎2010NHK/販売元トランスフォーマー4410円(税込)。

子どもたちに阪神・淡路大震災を経験した男女が、追悼の集いが行われる前日に神戸で偶然知り合い、震災当日から15年後の朝を共に迎えるまでの姿を描いた人間ドラマ。2010年1月にNHKで放送されたドラマに新たな映像を加え、再編集バージョンとしてスクリーンに登場した。主役の森山未来と佐藤江梨子には実際に震災を体験している。東日本大震災のことを直接考えることも大事だが、15年後どうなっているのか、どうなっていたのかを考える材料となる。